

7 6 5 4 3 2 1

80

9

8

7

6

5

4

3

2

1

十八

金



卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

古ふ心集

文庫藏印

文庫藏印

文庫藏印

正月

本と雪ひさうかるかくこ

一春そそは花よやのえんまくと雪れ

カシカシえもたうじゆすばりかく

二月

梅の花をわれて人のかりやすと

あらぬゑくはねりてかくせと

寛平序時主寄合

三月

ちらみてあくきりはみ梅のむ

じてにうひゆ神よし

後撰

梅の花たむにうぢくわうてに

後撰

うぢくわうてに

にわいはうれ家日がうつせとせん
山やまをえて

見てよしやくよしよし花おはな見
てよしにねりて家いえにせん
見るよし柳やなぎをこもるせて
都みやこす春はるけにさかうせん
まともいはにちうてとまわらななハ
なにうそにねりあは

寛平卯月后のの平令めいに

花おはなす風かぜのたよりはれり
我われをすゆうて

四

花おはなの春はるをみみて

花おはなの春はるをみみて

花おはなの春はるをみみて

花おはなの春はるをみみて

朱雀院しやくいんの卯う月つきのまつり

いざりは春はるの山やまにまつり
うれかほなれひよひよ
また春はるみてとへのよに
あらうちすよばくへゆ
をとどのよそよそすよもひまで

枯風のまよせし火
人のたましにさがる
アヒト、ふくらはせ
あがめと、川

かよひし草、
ほれかうんのち
三月田うり

山田トモヒト
春日町にて
身の心を
和らぐ
ゆき

سکونت
میگیرد
لذت
میگیرد
لذت
میگیرد

拾遺

新井 様
おめでとうござ
とくにえで

いとくわ
わが本入
人間のうみ
みえ
れすの記王五
禁
禁
禁

屏風

い西へとあがめ
ちゆせん
はりま
そよぐ
おもてに
かく

かみすらうるさいものとし

後撰

この間つまちとぞうとあさせられ

後撰

前院のうらが即ちうてと

なせぬよの院比ひにあはれ

かくうけゆき

をとくねづ修りゆゑ

ひくわああすくすく

お前にありちて住みゆけ

ゆく人をうそ

うしやのいじとつとし

三すくめあすくせ

二素れうとうせほ息とまことを

ひくはく屏風のたまに田川の

ちがくはくはくはくはくはくはく

タクタクはくはくはくはくはくはくはくはく

タクタクはくはくはくはくはくはくはくはく

山ありてはいもいもす
まへのそれさてかくん
まよひしのふせつけり
のによしにまいかくし
きとくものにてくら
ゆきとくにかくす
ゆれおの、古えて山
す勝きとくにまくす
の水はすとくす
モにまくす

かくもとてえかうふ
にまつりとせんじ
がくのアドヒキ
とめてもさき
山ゆかたひは
かくもとてえかうふ
にまつりとせんじ
がくのアドヒキ
とめてもさき
春りこすあ
いおとく
をとくち
とくとく
かくもとてえかうふ
にまつりとせんじ
がくのアドヒキ
とめてもさき

ひとひよすかとよてお
いよじのまはりすか
あらじてはまにせぬかとよて
ましにまうりにゆきを
梅うゑのくわくとうはま
うにむだつておはや
うひをうへくせのやに
ひまうをうふ
はるねにりとうけ
はるねをいせ
こひきとくわ
あらうのまくわ
あらうのまくわ
なまくわにまくわ
つまくわ
はるねをうけ
はるねをうけ
ひまうをうふ
ひまうをうふ
ひまうをうふ

れ山後撰やま

たまのうあとけてやましん

みねのつねよでながり

はり

せね松天をいづつ
すとせのうすまるとわ

小山後撰やま

おはうまうとさん人のみ

仙人のすに萬入りて入る

められてほく山ちれまくはる

立田後撰やま

ゆくはまみのむけよかく

川北山後撰やま

あらわせわざとわらうと

山をのまわととみてくね

とまればわやたりすを題に

れりせらうれやたりすとくらみてす

とまるとくまことにすてくら

やまほりのくのまくらねの
にあらかすみかもんと
天曆のさうりせをうて河内比阿寺
まぜぬ不せいかとくじりと
けりきを

旅よそせよれとひが
よしわくうけ

さ月人のわもしします

風ふるむとくらうひき

即屏風のゆきすふ

春よめにうづく
そむとのゆへうかとひなきて

老うへんうきとひのまつり
木風のゆき、あやめは

えむゆきのうらう

人すまぬあはる家とましれ
かうすまのうにまなづき

又、此の御内閣をみたれど、何處の事は

御内閣と云ふてゐる事は

御内閣の事は、さうある事は

ノハヤアセの事は、さうある事は

山喜と云ふてある事は

と云つてある事は

いづれをも、あらゆる事は

いたる事は、あらゆる事は

いたる事は、あらゆる事は

